

鹿児島の昆虫 76

昆虫の卵

昆虫担当 中峯 敦子

地球上に 100 万種以上いる昆虫の多くは、卵から生まれます。外敵から卵を守り、また生まれた幼虫が環境にうまく適応できるよう、卵の形状は種により違い、多様性に富んでいます。今回は、繭(まゆ)や卵囊(らんとう)に包まれたり、周囲によく溶け込み、巧みに隠されたりする個性的な昆虫の卵をご紹介します。

ひも状の卵

5月、イスノキの枝に白いひもがぶら下がっていました。ヒモワタカイガラムシのメスがつくった卵囊(らんとう=卵の入った袋)です。この中には3,000個ほどの卵が入っているそうです。



ヒモワタカイガラムシの卵囊(長さ最大約 60 mm)

植物に間違えられた卵

クサカゲロウは、草や枝に液を落とし、腹を持ち上げて糸状に固めると、その先端に卵を生みます。草木以外に壁や照明器具の傘など人工物にも複数個まとめて生みつけられます。古くは、「優曇華(うどんげ)の花」と言われ、3,000年に1度開花する世にも奇妙な植物と考えられていたそうです。



クサカゲロウの卵(長さ1mm※糸部を含めない)

スポンジに包まれた卵

晩秋、湧水町の草原で薄茶色のオオカマキリの卵鞘(らんしょう)を見つけました。スポンジ状に固まった卵鞘中には、5mmほどの細長い卵が200~300個入っています。小さな穴が多数ある卵鞘は、断熱効果があり、外圧にも強いので、卵は安全に冬を越すことができます。



オオカマキリの卵鞘(最大部の直径約 30~40 mm)

繊細な彫刻が施された卵

「コンペイトウ(金平糖)」にも例えられるその卵を学生時代、初めて実体顕微鏡でのぞいた時の感動は、今も忘れることができません。一部のミドリシジミ類(チョウ)の卵には、種ごとに特徴的な突起が見られます。



キリシマミドリシジミの卵(直径約 0.9 mm)